

2015 SUPER GT Rd.4 富士

**TOP OF THE MOUNTAIN!**

「ついに訪れた歓喜の頂点」





「すごいじゃん！今夜は特上の鰻2人前だよ！」

鈴木亜久里監督が笑顔で無線越しに言った。

厚い雲が前日までの強い陽射しを覆い隠した土曜日の富士スピードウェイで、予選後のARTAのガレージは沸きに沸いていた。

GT300クラスを戦う55号車ARTA CR-Z GTがポールポジションを獲り、GT500クラスの8号車ARTA NSX CONCEPT-GTも2番グリッドを獲得したのだ。

これまでの苦難の道のりを思えば、興奮しない方がおかしい。

「お前ポールでも狙ってんの？ そんな緊張するな」

予選直前、55号車のコクピットに収まりこれからタイムアタックに出ようかという小林崇志に、亜久里監督が言った。

「いや、そこまでは無理ですね（苦笑）」

それが本心か、はたまた謙遜か、小林はそう返事をした。

前戦タイの後、菅生と鈴鹿でテストを行ない、新しいセットアップが見つかった。



さらにはM-TECがエンジンのさらなるチューンナップを施してもくれた。

その甲斐あって、フリー走行で好感触はあった。

しかし、いきなりトップに立てるとまでは思っていなかったというのがARTAの面々の正直な気持ちだった。Q1でトップタイムを叩き出した小林に続き、Q2のアタックを担当する高木真一もトップタイムを記録してポールポジションをものにした。

「凄いじゃん真一、小林と同じ1分37秒7だよ！」

土屋圭市エグゼクティブアドバイザーも手放して賞賛した。

「オジサン、頑張るね！」 亜久里監督もベテランの高木を茶化して言ったが、  
当の高木は「黄旗がなければもっと行けた」とさえ言う。

GT500クラスのQ2で8号車のステアリングを握った松浦孝亮は、最後のアタックで



最終コーナーのラインが乱れて惜しくも2位  
に終わった。

それでも、トラブルが見つかったあるパーツ  
を交換したARTA NSX CONCEPT-GTは  
見違えたような快走を見せていることに違い  
はない。

「ゴメ～ン、最終コーナーで失敗した。

あああ～っ、腹立つ！

でも35歳のオジサンも結構やるでしょ？」

「でも2番手だよ。

今日は充分良い仕事したんじゃない？」

8号車を担当する佐藤真治レースエンジニアは、そう言って松浦の労をねぎらった。

「決勝が雨なら絶対勝てる！ あ～、どうしよう。

そうだ、勝ったらドアを外して掲げて見せますから！」

時折曇っては小雨が落ちてくる空にそんなことを言っていた松浦だったが、決勝は曇こそ多いものの雨の予兆は全くないままスタートの時刻を迎えた。

「1周目トップで帰ってこられたら勝てる」

1周のタイムではライバルたちを凌駕する実力を持つARTA CR-Z GTだが、ストレートスピードでは車両規定の異なるFIA-GT勢に及ばない。

もしストレートで前に出られてしまえば抜き返すことはできず、得意のインフィールドでは抑え込まれるという、前戦タイと同じように負のスパイラルに陥ってしまう。そこで、土屋が囁いた。

「真一、これで26kg軽くなったらトップ狙えるよ……？」



土屋が言わんとしていることは何か。

26kgというのは、60度を超える暑さのコクピット内でドライバーのレーシングスーツに冷水を循環し身体を冷やす“クールスーツ”装置の重量だ。

つまり土屋は、それを降ろしてマシンを軽くしてストレートで少しでも逃げられるようにしようと言うのだ。



もちろん、クールスーツがなければドライバーたちは脱水症状を起こしてもおかしくないほどの厳しい暑さと戦いながらのドライビングを強いられる。

それでも、勝利に挑むためには不可欠なチャレンジ。ドライバーたちは、もちろんそれに同意した。

「真一、集中していこう！ グランドスタンドの上に凄くデカイ雲があるよ。真一のための決勝みたいな雲だよ！」

「はい、頑張りますよ〜！」

GT500クラスのスタートが切られ、野尻智紀がステアリングを握った8号車は36号車RC Fと激しいバトルを繰り広げながら、2周目の1コーナーでオーバーテイクを許して3位へ落ちた。

そして半周ほどギャップを置いて、いよいよGT300クラスがメインストレートを通過しスタートを切る。



高木は長いストレートでもFIAGT勢のストレートスピードをものともせず、トップのままで1コーナーへ飛び込んでいった。

「クールスーツ降ろしたのが効いたかこれ!? 頑張るよ〜！」

「真一、カッコイイじゃん！」



2位争いが激しくなり、高木は単独走行でどんどん差を広げていく。

レース状況を伝える55号車担当の一瀬俊浩レースエンジニアの無線に、高木もさらにペースを上げる。「後ろはみんな1分41秒7」

「要は詰まってるわけだね？ よし、（ギャップを）稼ぐよ〜！」

一方、3位にポジションを落とした8号車の野尻だが、好ペースで追い上げて前の36号車RC Fを追い詰めていく。佐藤エンジニアが野尻を勇気づけるように言う。

「野尻のペースは決して悪くないよ。周りはみんな1分32秒台。」



Honda Racing



CMS

21

OUTSIS

alpinestars



野尻の方が0.5秒以上速いから。悪くないから落ち着いて」

そして19周目の終わりにストレートで捕えたものの、1コーナーでインに入ってきたGT300のマシンと交錯して接触してしまった。

「マシンバランスの変化はある？ 左側のチンスポイラーを踏まれて、時々引きずって  
るみたい」

心配する佐藤エンジニアの問い掛けに対して、野尻は落ち着いて答えた。



「特に変わってません」

再び前を追い上げた野尻は、29周目に最終コーナーでインを突いてパス。

これで再び2位に上がった。「あと8周くらい行ける？」



「ペースが良くないんだったら入っちゃった方が良いんじゃない？」

「今のところペースは悪くないよ。もし38号車がピットインしたら次の周に入れるから、その時は100%プッシュして」「もうやってるんだよね（苦笑）」

「了解（苦笑）」そんなやりとりもあったが、トップの38号車がピットに向かったため野尻は33周目にピットへと呼び戻された。

そしてピット作業を終えてドライバーチェンジをした松浦がコースへと復帰したが、なぜか12位まで落ちていた。

「なんでこんなにピット遅いの、ウチ？」

松浦はそう言って嘆いたが、メカニックたちのピット作業にミスは無かった。



しかし後方は秒差で数台が連なっており、僅かな作業時間の差が大きな順位の変動に繋がってしまったのだ。

そこから松浦は猛烈な追い上げを敢行し、次々と順位を上げていった。

しかし8位まで浮上していた43周目、左リアを引きずりながら走る8号車の姿がテレビモニターに映し出された。またしても1コーナーでGT300クラスのマシンに前を塞がれ接触してダメージを負ってしまったのだ。

「ああ～、ゴメン！ 終わった……。アプローチの前にはインに入ってるのに、ああ～、もう！」



松浦はやり場のない怒りをステアリングに叩き付けることしかできなかった。

「クルマは動いてるの？」

「多分サスペンションが曲がってる……」

「まっすぐ走らないってこと？ ピットに戻ろうか？」

「もう走れない、クルマ止める？」

「そうだね、邪魔にならないところで止めて」

こうして優勝争いさえ見えていたはずの8号車のレースは終わった。

亜久里監督も「悪くても表彰台に乗れる手応えがあっただけに凄く悔しい。





SUNLINE BRIDGESTONE

sparco

can

EXGEL

ta

BR

EXGEL



AUTOCOBACS



Holts

Coca-Cola

RT-PRO

ARTA  
DIGITAL  
2014

次回は完璧なレースをしたいね」と悔しさを滲ませた。

だが、ARTAにはまだ55号車がいた。

2位以下に大差をつけたまま28周を走り終えたところで高木はピットインし、

ドライバーが小林に代わる。すると、すぐに小林が異変に気付いた。

「ブレーキの摩耗が激しいね。(ペダルの)ストロークが奥にいっちゃってて奥に当たる」

55号車はこれまでも上位で争えるはずのレースを何度もトラブルで失ってきているだけに、小林からの無線にチーム内には嫌な空気が流れた。

しかし土屋エグゼクティブアドバイザーがドライバー経験者らしく的確なアドバイスを小林に送ってチーム全体を落ち着かせた。

「2番手のZ4に12秒のマージンがあるから、1周1秒ずつペースを抑えて、5周の間ブレーキを冷やせ」

それをサポートするように、一瀬エンジニアも常に2位とのギャップを小林に伝える。「Z4が来るまでブレーキを冷やせ！」

そうしているうちに、2位のZ4はタイヤバーストに見舞われて後退していった。

「高木さんから、縁石をあんまり使わないように、タイヤを労っていった方がいいよって」

マシンを降りてピットガレージでクールダウンしながら戦況を見守っている高木も、気が気ではないのか一瀬を通じて小林にアドバイスを送る。

「今くらいのペースでいい？」 「OK、OK」

全車がピットインを終えた時点で、SLSに変わった2位との差は20秒。

外からはペースを守りながら冷静に淡々と走っているように見える小林だが、

いつも以上に気合いが入っていることもまた事実だった。



スーパーGTに不慣れなバックマーカーのブロックに対し広島の方言を出し、

声を荒げる場面もあった。「何してくれとんじゃ、ホンマに！」

レースは終盤を迎え、もうカウントダウンに入っている。

しかし、クールスーツを使用していない55号車の高木と小林にとっては、約30周の  
スティントがこの上なく厳しいものになる。「残り何周？」

「15周」「そんなにあるのお？」思わず弱気になる小林に、土屋が檄を飛ばす。

「頑張れよ、小林！頼むよ！」

そして、普段は55号車のレース運営に口を挟まない亜久里監督も、  
この時ばかりは小林に無線で直接語りかけた。

「小林さあ、1秒前でゴールすりゃ優勝なんだから。

落ち着いて丁寧に大事にいきな！」



その励ましに「了解です！」と力強く答えた小林は危なげない走り続け、一瀬からの「残り5周」という無線を受けるとまるで自分自身を鼓舞するかのよう「うおっ！ 頑張るぞ〜っ！」と雄叫びを上げた。

残り3周、小林は「氷水用意しといて」と無線で伝えてきた。



栄光のゴールはもう目の前だ。

しかし灼熱のコクピット内で、体力はどんどんキツくなっていく。

「もしかしたら脱水症状かもしれないから、チェッカー受けたら小林に氷水と飲み物持ってってよ！」土屋が小林を気遣ってスタッフに指示を出す。

「頑張れ！ ファイナルナップだぞ！」

最後の1周も、小林は何事もなく力強く走り切って戻ってきた。

きっと、テレビの画面だけを見ていればコクピット内で小林と高木がこれほど過酷な戦いをしてきたことなど、微塵も感じないに違いない。

そのくらい、この日のARTA CR-Z GTは速く、ドライバー2人もチームスタッフもみな完璧なレースをした。

チェッカーフラッグを目の前にして、小林が無線のボタンを押す。

「最終コーナー立ち上がったよ」「了解、了解。見てるよ！」

一瀬がそう答え、ピット前のメインストレートを小林がゆっくりと駆け抜けていく。



チェッカーフラッグが打ち振られ、チーム全員が待ちわびたその瞬間はついにやってきた。「やった〜〜〜！ 勝った〜〜〜！」



叫びながらチェッカーを受けた小林を、スタッフが総出でピットウォールによじ登って出迎える。

「よくやった小林！ お疲れさん！」 土屋がねぎらいの声を掛ける。

「みんなノーミス、完璧でしたね」 小林がスタッフ全員を讃えた。

土屋エグゼクティブアドバイザーも、灼熱に耐えた小林の身体を気遣う。

「小林に氷水とドリンクを持って行って！」 「お願いします、ぶっかけてください」

「小林、ありがとうね」

「いや、高木さんがギャップを作ってくれたからですよ。

みんな、本当にありがとうございました」

表彰台の下にクルマを止めた小林を、高木が身体全身で喜びを表現しながら出迎え、抱き合った。いくつもの悔しさと苦しみを乗り越えて手にした歓喜だけに、なおさら嬉しさが溢れ出る。

待望の今季初優勝を挙げ、さらに次は得意の鈴鹿。

チームメンバーは誰もが「次も勝つ」と声を揃える。



富士で山の頂点に立った彼らがどのような戦いぶりを見せてくれるのか、ますます楽しみになってきた。



そして、8号車も長い不振のトンネルの先に光明が見えるところまできている。

彼らの歓喜の瞬間も、もうすぐそこまできているのだ。

あとは、それを抜け出たところに何が待っているのか。

大きく成長したARTAの次なる戦いに期待をしたい。



## RESULT

### GT500



ARTA NSX CONCEPT-GT NO.8 松浦 孝亮 / 野尻 智紀

公式予選	決勝	TIME DIFF	BEST LAP	ドライバーズランキング
2位	-	23Laps	1'31.216	13位

### GT300



ARTA CR-Z GT NO.55 高木 真一 / 小林 崇志

公式予選	決勝	TIME DIFF	BEST LAP	ドライバーズランキング
1位	1位		1'40.197	3位

# クルマをもっと楽しむために

## モータースポーツ&カーライフ

モータースポーツを“観て”“知って”“体験する”私たちamscはモータースポーツの応援を通してスポーツが持つ夢・あこがれ・感動を体感し、豊かなクルマ社会の創造と発展に貢献してまいります。



AUTOBACS Motorsports Conference

オートバックス モータースポーツ連絡協議会

[amsc参加企業]



株式会社アスコット 株式会社アネブル 安全自動車株式会社 株式会社イヤサカ 株式会社ウェッズ Fデザインオフィス オカモト産業株式会社 コアーズインターナショナル株式会社  
株式会社サンコー 株式会社サンテック 株式会社ジーエス・ユアサバッテリー 株式会社湖南レオテック 東京工科大学自動車大学校 日星工業株式会社 株式会社バンザイ  
株式会社フィリップスエレクトロニクスジャパン ブリッド株式会社 株式会社ホットスタッフコーポレーション マルカサービス株式会社 三菱重工業株式会社 株式会社ユビテル 株式会社ワッツ

2015年3月2日現在会員企業

amsc (AUTOBACS Motorsports Conference) とは株式会社オートバックスセブンを中心に、自動車用品関連企業約100社が参加する任意団体であり、モータースポーツを核として「世界中のドライバーを車好きに変える」為に、自動車関連マーケット全体の活性化を目的とした団体です。将来的には、日本のモータースポーツ文化の発展と新たなカーライフ文化の創造に貢献していきたいと考えております。



Thank You for Supporting  
Samantha Thavasa Japan Limited  
Calm Flower  
ARTA GALS



株式会社オートバックスセブン



ARTA Project



ARTA DIGITAL  
Youtubeチャンネル

To be continued next race.....

**ZERO** BORDER  
Team ZEROBORDER

Copyright c2014 ZEROBORDER INC. All rights reserved. No reproduction or republication

Director and Photographer : Masakazu MIYATA  
Text : Mineoki YONEYA  
Design and Web Creator : Akira YOSHIDA

Special Thanks : AUTOBACS SEVEN CO.,LTD